

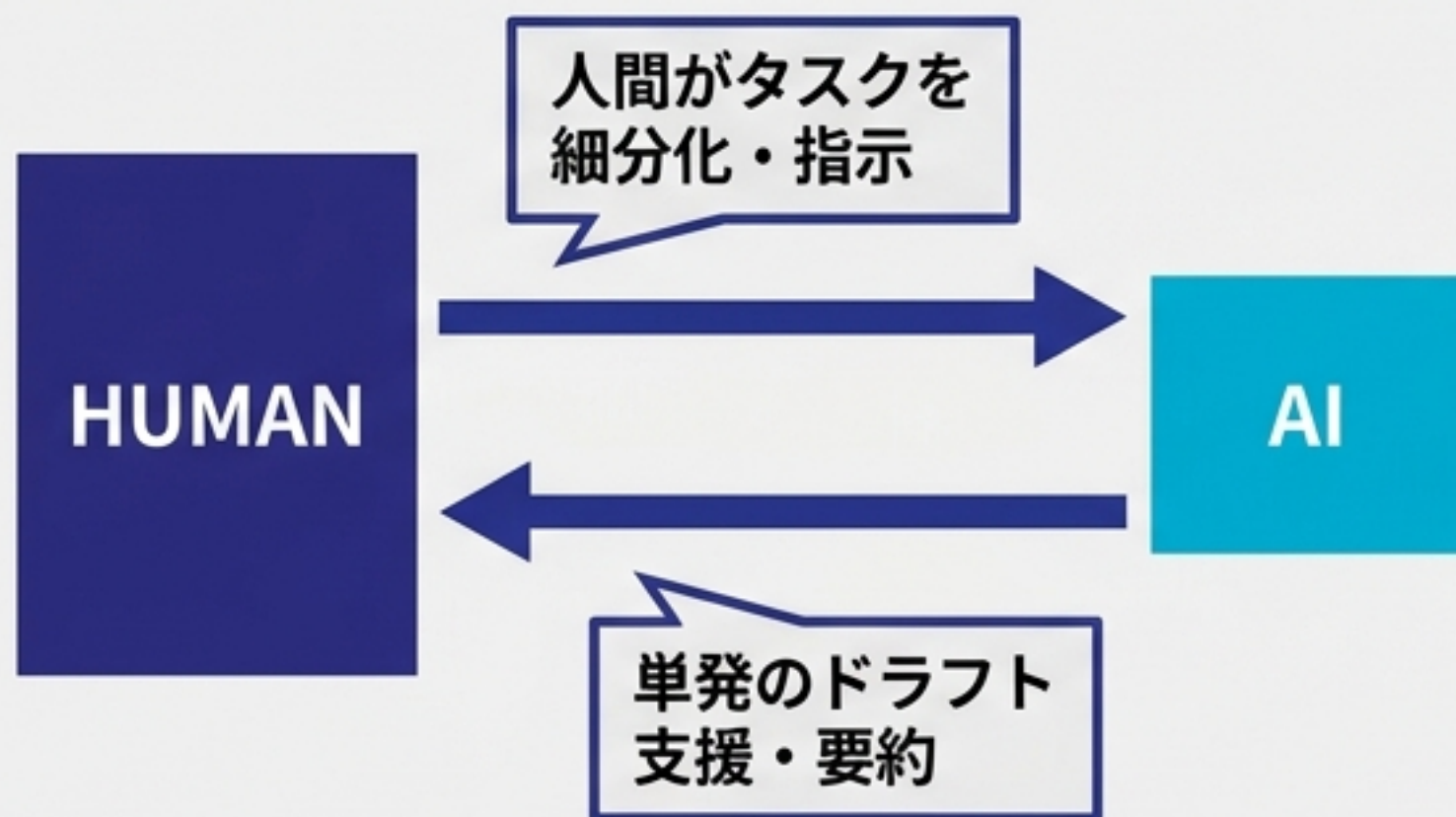
エージェント時代の知財見取り図

Claude Fable 5.1がもたらすパラダイムシフトと知財戦略プレイブック

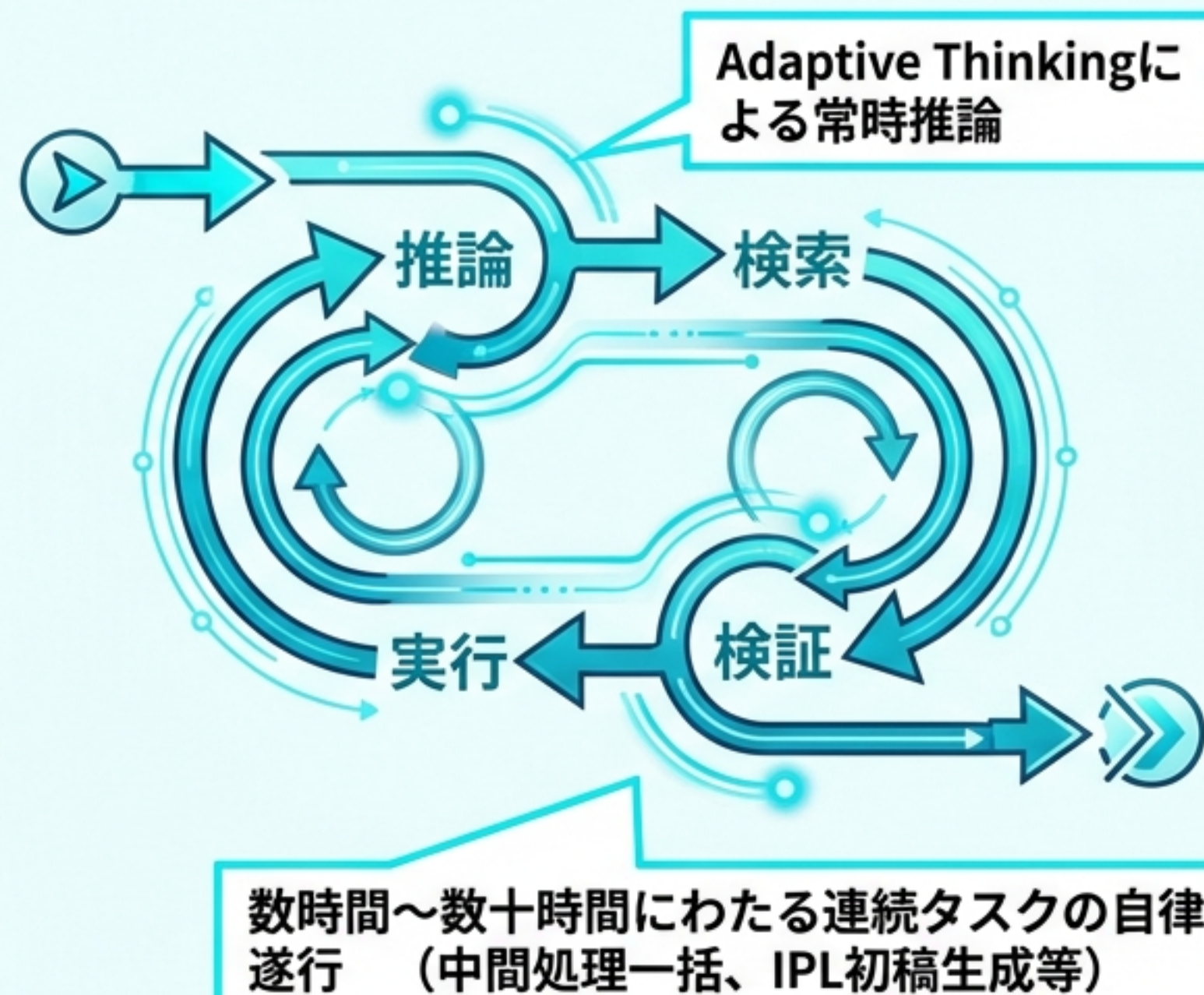
Executive Briefing | September 2026

知財AIの本質的転換：「補助ツール」から「自律エージェント」へ

【Fable 5時代】人間主体の「一问一答」



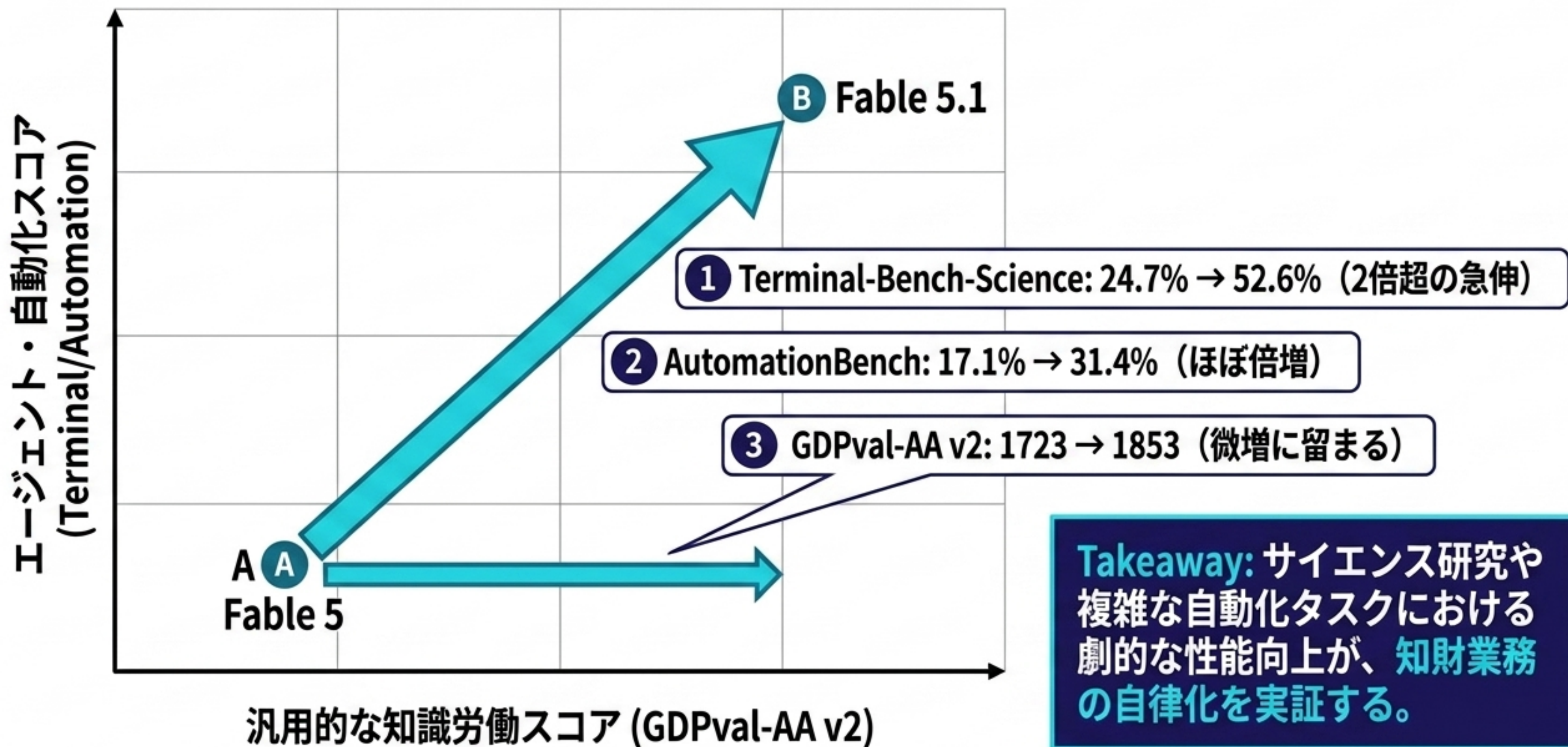
【Fable 5.1時代（2026年9月～）】 監督なしで稼働する「自律ループ」



【コア・トランスフォーメーション・マトリクス】 Fable 5 vs 5.1

評価軸	Claude Fable 5 (2026年6月)	Claude Fable 5.1 (2026年9月)
役割	プロンプト依存の補助ツール	長時間稼働の自律エージェント
実効コスト	1Mトークンあたり高コスト	キャッシュ読取75%減 (1ドル→0.25ドル)
セーフガード誤検知	サイバー/生物領域で頻繁に介入	サイバーで約60%減、生物学で約85%減
回答傾向	保守的・フォールバック過多	攻めの回答 (誤答時の回答試行率上昇)
ガバナンス	30日データ保持義務化	EFS (実質ゼロデータ保持) の選択肢追加

The Proof : 進化のベクトルは「汎用知識」から「エージェント・自動化」へ



経済的ブレイクスルー：反復読取のコスト障壁崩壊

Context Pool

分厚い特許公報や技術文書の
キャッシュ (1M tokens)

Fable 5: \$1.00 / 1M tokens

都度コスト発生

Fable 5.1: \$0.25 / 1M tokens (75% OFF)

エージェントによる反復的・自律的な情報アクセス

Key Insight: 典型的なワークロードで約25%、高度なエージェント作業で最大約45%の実効コスト削減。同一文脈を何度も読み直す「知財エージェント運用」が初めて経済的に成立。

要注意リスク:「攻めの回答」化による検証コストの増大

正答率
(AA-Omniscience)

67.2%
(測定史上最高)



誤答時の回答試行率

Fable 5 (63.6%) → Fable 5.1 (72.6%)



知財業務における致命的落とし穴

- 1. 両効果が相殺し、Omniscience Index自体は横ばい。
- 2. 法務・知財領域では、もっともらしい嘘 (ハルシネーション) の増加は致命的リスク。
- 3. 5.1時代は「引用文献の実在性」「段落番号レベルの正確性」に対する人間の検証 (Human-in-the-loop) が必須。

【知財ドメイン別進化マトリクス】AIの介入深度の変化

先行技術調査/
無効資料

母集合作成 → スクリーニング → 対比表作成までの一連を半自律実行。(※文献実在性の人間検証は必須)

中間処理
ドラフト

第1ターン品質が約2倍。拒絶理由対応の定型部分は大きく委任可能(補正の適法性判断は人間)。

IPL
ポートフォリオ分析

複数データソースを横断したIPL初稿を一晩で自律生成。経営への「問いの立案」は人間の付加価値に。

発明発掘
R&D連携

AIが仮説生成～実験計画まで自律遂行。「人間の貢献」の法的証明が実務の新たな焦点に。

5.1時代を先取りする国内導入事例(ユースケース・プロフィール)



MIXI

- 【対象】 拒絶理由対応・査定評価
- 【運用】 PDF入力で約1時間で一括処理
(エージェント型移行)
- 【成果】 目標「5人で30人分のアウトプット」



オムロン

- 【対象】 知財業務全般(AIZAQ / RD Buddy)
- 【運用】 Amazon Bedrock等による
プライベート環境
- 【成果】 知財作業の約8割をプロンプト化し委任



NTTドコモビジネス × キヤノン

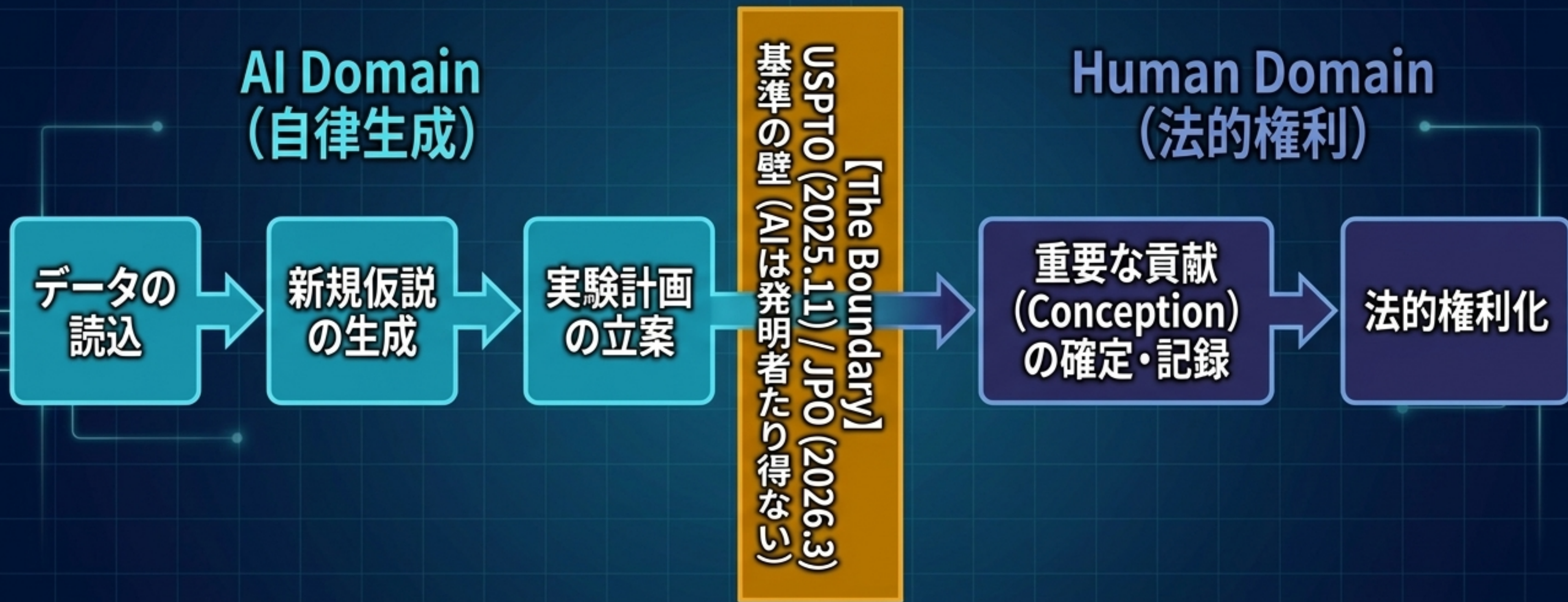
- 【対象】 アイデアシート作成支援
- 【運用】 Human-in-the-loop設計、
プライベートクラウド運用
- 【成果】 発明の言語化による時間短縮と
心理的負担軽減



NTTデータ

- 【対象】 発明発掘・提案書作成支援
- 【運用】 「AIによる自動生成」ではなく
「研究者の発掘支援」と明言

AIと人間の「発明者適格性」境界モデル



Key Insight: 自律化が進むほど、各請求項に対する「自然人（人間）の真の技術的貢献」を明確に切り分け、記録（ログ）するプロセス設計が知財部門の最重要実務となる。

「サイエンスエージェント化」の実像とアクセス制限

Mythos 5.1 (アクセス限定)



- ・タンパク質バインダー設計（ヒット率約50%）
- ・NASA画像の標高マップ高解像度再構築

※米政府連携・Life Sciences Verification Program限定

Fable 5.1 (一般提供版)



- ・一般利用は「化学分析（生計測ファイルから25分でレポート化等）」までに制限。
- ・高度な研究生物学の要求は意図的にブロックされる。



Takeaway: 自社のR&D部門が「どこまでのAI機能を使える前提か」を正確に把握し、共同発明戦略を構築する必要がある。

ガバナンス・リスク：フォールバック挙動の落とし穴

入力：機密情報を含む知財プロンプト（出願前）

セーフガードによる判定
（脆弱性発見・生物学要件）

通常ルート 

Fable 5.1での処理（安全）

 迂回ルート
（誤検知含む）

下位モデル（Opus 4.8 / Opus 5）
へのフォールバック実行

 **Risk Warning:** Fable 5.1で誤検知は大幅に減少（生物85%減等）したものの、フォールバック発生時の機密情報保護の挙動を法務・情報システム部門と事前に確認することが必須。

知財データ・ガバナンス境界マップ

【推奨・安全領域】

Enterprise Frontier Safeguards (EFS):
顧客自身のクラウドにデータ保持
(実質ゼロデータ保持)。
2026年秋～段階提供。

【要警戒領域】

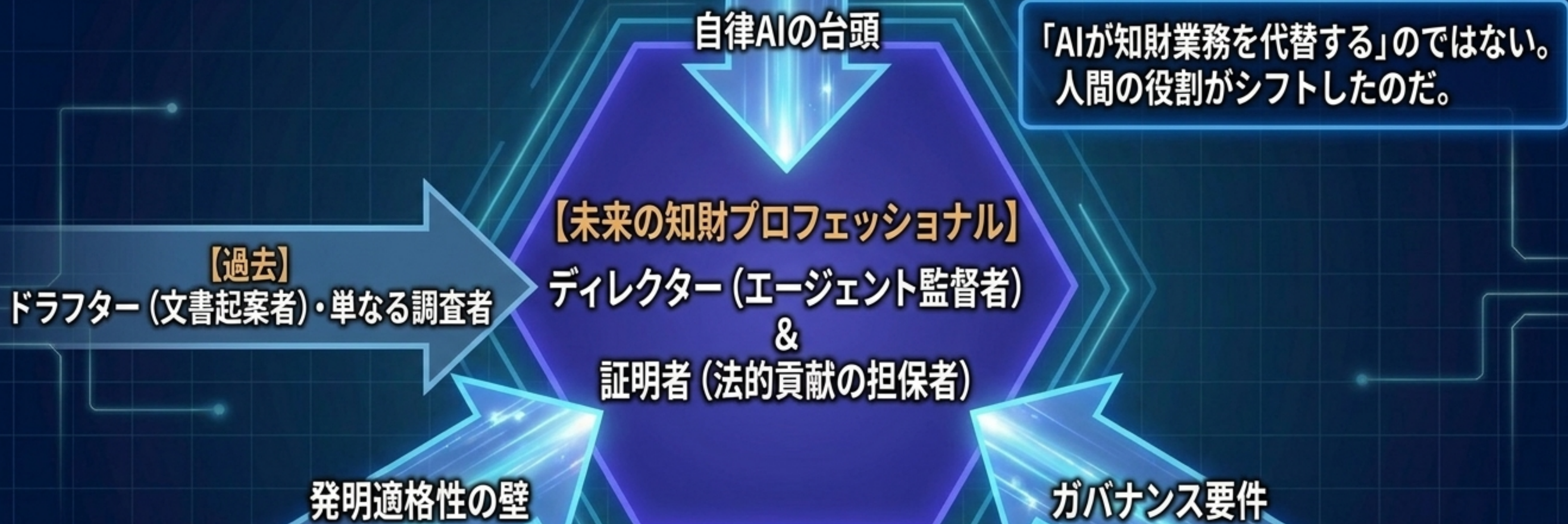
標準API利用:
全トラフィックで30日
のデータ保持義務。
学習には非使用だが、
人間 (Anthropic側) の
アクセス記録が残る。

【禁止領域】

影のAI (Shadow AI):
野良AIエージェント
の無統制な利用。

Action Point: 出願前情報を扱う知財部門は、「原則ゼロ
データ保持 / EFS」または「オンプレ・プライベートクラウ
ド」での運用を基本方針とすべき。

Synthesis：知財プロフェッショナルの役割の再定義



AIがエージェント化し自律稼働する世界では、出力された結果の「適法性の担保(補正要件等)」「自然人による貢献の法的証明」「FRAND等の高度な戦略交渉」こそが、人間の専権事項となる。

The Playbook: 知財部門の戦略的ロードマップ

Step 1: 即時（～3か月） - 本格導入とトライアージ

- 「調査・要約・ドラフト」を日常業務に本格導入。
- 業務の8割超を定型プロンプト化できる高難度タスクのみ Fable 5.1へ振り分け、他は Opus 5でコスト最適化。
- 出典検証プロセスをルール化。
- 出典検証プロセスをルール化。

Step 2: 中期（3～9か月） - エージェント化と版管理

- 中間処理・IPL初稿生成の自律エージェント運用開始。
- プロンプト資産のGit等での版管理体制構築（MIXI型）。
- EFSまたはプライベート環境でのデータ保持契約の確約。

戦略の見直しトリガーとKPI



JPO/USPTOによる「AI活用発明」
の審査基準・ガイダンス更新



EFS (実質ゼロデータ保持)
の正式稼働状況



「5人で30人分のアウトプット」
到達へのプロンプト資産蓄積率

The blueprint is drawn. The agents are ready.
The next era of IP strategy belongs to those who direct them.

(見取り図は描かれた。エージェントは稼働を待っている。
次世代の知財戦略は、彼らを監督する者の手にある。)